

## 蕪村

池松 孝子

今では与謝蕪村と言えば、江戸時代の俳諧三巨匠として松尾芭蕉、小林一茶と並び教科書にも取り上げられている。しかし、「俳人」として認知されるようになったのは明治以降、正岡子規の『俳人蕪村』で紹介されてからで、それは蕪村の死後百年以上経ってからのことだ。その後、昭和前期の詩人萩原朔太郎の『郷愁の詩人、与謝蕪村』が世に出て俳人としての地位を確立した。それまでは池大雅と並び称される文人画の巨匠として知られていた。池大雅は文人画家であり書家であった。蕪村は文人画（南画）家、書家であることに加えて俳諧師であった。

国宝として知られる与謝蕪村の「夜色楼台図」、それは雪の降り積もる京都の夜景だ。長年画集などで親しんでいて実物に出会えるとは思っていなかった。今から十数年前のこと、京都の国宝展で直に目にすることができた。一メートルを超える横長の掛け軸だった。雪の夜、軒を連ねる京の町屋の上を照らす月。本来、水墨画では雪の白さは塗り残し紙の白さそのもので表現するが、蕪村は胡粉を塗っている。通常の水墨画の画法では見られないものだ。また、人家の灯りを表すためにところどころにわずかな朱が入れられている。「ろうそく色」と言う言葉があるかどうか知らないが、それを目にすると、まさに「人のぬくもり」を感じるのだ。それがいい。そこに住まいる「貧しき町」の人々の営みが見て取れるからだ。冬の景色に不思議な温かみを感じられる。

蕪村の作品は俳諧と絵画が重なり合う。「夜色楼台図」を思うとやはりこの句が思い浮かぶ。

月天心貧しき町を通りけり

蕪村

これに加えて私が思いを重ねるのは三好達治の詩「雪」だ。「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪降りつむ。次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪降りつむ。」「太郎」「次郎」と固有名詞でありながら、ここでは特定の人を指す固有名詞ではない。十代にこの詩に出会ってから、心落ち着く好ましい詩としていつも忘れない。